

中国における過労の実態と要因

—二重労働市場のなかで流動する農民工の就労—

WU Zhenxi

本論文は中国で起こっている過労問題のなかでも、とくに長時間労働者の割合が高い農民工に焦点を当て、戸籍に起因する都市労働市場の二元化が、彼らの過労を誘発する原理の 1 つとして機能していることを論じている。

近年中国では過労研究が新たな学問領域として注目されはじめている。それまで中国の過労研究は日本を主体とする諸外国の過労・過労死研究を紹介・検討するに留まり、学术界において重要視される存在ではなかった。しかし、2000 年を境にその傾向にも変化が現れ、徐々に中国国内で起こっている過労問題へと研究の力点が置かれるようになった。また、中国独自の切り口として「適切な労働」という視座から過労問題を分析する研究も登場している。中国の労働市場では市場競争の激化によって過重な労働に従事している労働者が存在する一方、市場から排除され、仕事能力のない労働者がその対極として存在する。この中間に位置する概念を「適切な労働」と称し、その理論を体系化するため、2012 年に「適切な労働研究センター」が組織され、翌年には「適切な労働研究分会」が設立された。中国では過労研究はいまだ発展途上の段階にあるが、その歩みは着実に進められている。

しかしながら、過労研究には依然多くの問題が残る。1 点目に過労の概念が統一されていないこと、2 点目に研究に参入する専門領域に偏りが生じていること、3 点目に中国特有の過労問題に対する理論が体系化されていないことが指摘されている。今後の過労研究の発展には上述した課題の解決が必要となるだろう。

中国の過労は IT 産業や知識労働分野に従事するホワイトカラー労働者と、製造業や建設業に従事するブルーカラー労働者の両方のケースが存在する。中国の都市部では労働市場の二元化が起こっており、製造業や建設業は長時間・低賃金・高強度の労働を求められる第二次労働市場に位置する。そして、それらの産業を支えているのは農村からの出稼ぎ労働者である農

民工であることから、彼らの過労が都市部ではより深刻であると予想される。実際に中国の労働時間を確認すると、農民工の労働時間は、世界レベルで見ても高いとされる都市労働者よりも月に30時間以上も多いことが判明した。また、週48時間以上働く労働者の割合は都市戸籍労働者がおよそ26%であるのに対し、農民工の数値は40%以上にも達する。加えて農民工が最も多く従事する製造業や建設業では、それぞれ3人に1人、2人に1人が長時間労働に従事していることが明らかとなった。

農民工は戸籍制度の緩和とともに都市の労働市場へ参入し、中国経済を支える主体としてその身を捧げてきた。ところが、彼らは都市労働者と同じ仕事に従事しても、受け取る賃金総額は都市労働者のおよそ60%程度でしかない。また、社会保障の加入状況に関しても両者の間に著しい格差が生じていた。このような格差の背景には、農民工が非正規部門や非正規労働者として都市部で就労することが主流となっていることが指摘される。そして、そのような不安定な就労は農民工が単に低学歴であるということだけでなく、戸籍差別によって彼らが人的資本を適切に評価されない第二次労働市場のなかに押しとどめられていることに起因する。さらに、農民工が所属する非正規部門は労働契約の締結率が低く、そのため不当な処遇を被っても雇用関係の立証ができず、彼らの権益を著しく侵害している。

戸籍差別によって労働市場の自由な移動を阻まれ、長時間労働を必要とする産業へ身を置かなければならない市場の二重性が、農民工の過労を誘発する仕組みとして働いていると考えられる。外需依存型の経済戦略によって飛躍的な経済成長を達成した中国の成功劇は、ひとえに低廉な労働力として企業の歯車となってきた、多数の農民工の存在があつてこそであろう。しかしながら、近年新生代農民工の台頭により、農民工の権利意識にも変化が見られ、ストライキや労働争議を起こすことで自らの境遇を変えようとする改革の意識が農民工の間で広まりつつある。農民工が弱くて使い勝手の良い労働力という認識には多少の変化が生じているのかもしれない。とはいえ、農民工への処遇が依然として差別的であり、都市住民よりも労働条件の劣る現場で働かなければならない現実には変わらない。彼らの就労実態を改善するには、戸籍を一元化し、戸籍に起因する差別を撤廃することが求められるだろう。また、職業訓練の充実を図ることで、市場化しつつある中国のなかで、農民工が自らの力で第一次労働市場に参入できるような機会を創出することが必要となるだろう。